

〔個人研究〕

特別支援教育を中核とする学校づくり
～「特別支援教育はみんなにやさしい教育」という理念の共有と
その具現化をめざして～

東近江市立八日市北小学校
校長 上野 芳 樹

I 研究テーマ設定の理由

今年度、本校に在籍する児童の中で、発達上の課題があり個別の指導計画を作成して指導にあたっている児童が21名いる。それ以外にも何らかの発達上の課題があると見られる児童が約30名いる。これは、在籍児童全体の10%を超える。

また、不登校気味の児童が5名いるが、そのうち3名は発達障害の課題をもっている。

更に、外国人児童が20名在籍している。この子たちも、言葉や、コミュニケーション力に課題があるという意味では、発達障害児と同じである。

4月当初の学級や子どもの実態は厳しかった。授業中、子どもどうしのトラブルが頻発し、落ち着いた学習が成立しにくい2年生。教室に入れず、個室にこもる児童。新しい学級になじめず、行き渋る子を毎日迎えに行く担任。特別支援学級(情緒障害)からはパニックを起こし泣き叫ぶ声が毎日のように聞こえ、そのたび手の空いてる教師が支援に走らねばならないという状況。

こうした現状から、今年度の最重要課題は特別支援教育の推進であると職員に提起し、了解を得た。全教職員が特別支援教育についての理解を深め、その視点に立つ実践を組織的に進めることで、この厳しい現状を少しでも改善したいと思った。

II 私の思い描く「特別支援教育」

～特別支援教育はみんなにやさしい教育～

＝「特別支援教育は、発達障害の児童を取り出して個別に支援すること」といった矮小化した考え方をしてはいけない。取り出しで対応できる時間などごくわずかであり、大半はそういう子どもたちも含んだ集団学習である。その集団学習の質をどう高めるか、それが特別支援教育の本当の実践である。＝

これは、現国立特別支援教育研究所の藤井茂樹先生の言葉で、今も強く私の心に残っている。発達障害のために集中の持続が難しい子や学習活動がスムーズに進まない

子ども学びやすい授業を創ること、それはすべての子に学びやすい授業である。つまり、「特別支援教育はみんなにやさしい教育」ということである。

この考え方を全教職員が共有し、発達障害児を視野に入れた授業改善を中核として一人ひとりの子どもの育ちを確かに育む学校を創りたいと思った。

Ⅲ 実践研究の方策

年度当初、おおよそ次のような取り組みを柱にしようと考えた。

1. 発達障害児童生徒への指導力向上事業(4～9月末)

事業のテーマを「一斉学習場面における個別支援のあり方」と設定し、取り組む。

2. 校内研究と特別支援教育のリンク

授業研究に発達障害児の視点からの分析も加えていく。子どもの側から教師の指導のあり方を見つめ直す。

3. 特別支援教育総合推進事業巡回相談

(「発達障害者支援センターいぶき」の田代先生巡回指導 年3回)

発達障害の課題が重く、特に個別支援の必要な児童について、その理解と指導のあり方を学ぶ。

4. 日々の小さな取り組み

日々の指導の中で、「こうしたら、うまく子どもが動いた」という手だてを見つけ、全体の実践に広める。

5. 実践研究の意識をつなぐための情報発信

全教職員が特別支援教育を意識し続けるために、継続的に情報発信をしていく。

Ⅳ 実践研究のあゆみ

1. 発達障害児童生徒への指導力向上事業(4～9月末)

2年澤井学級を研究対象とし、「一斉学習場面における個別支援のあり方」について計5回、県からスーパーバイザー、指導主事に来校いただき指導を受けた。

澤井学級の5月の教室と7月の教室とでは、子どもの姿に明かな違いがあった。5月には授業への不適応を示していた発達障害児が、7月の授業では生き生きとした表情を見せ、気持ちが切れかけてもまた集中をとりもどしていくといった姿が授業記録 VTR から見取ることができた。この二つの授業の比較検討により、「課題を有する児童も教師の指導力向上に伴い変容する」ということをみんなで確認できた。また、授業を支える教師の指導のポイント(声、間、視覚支援を意識した資料提示、支援の必要な子に即したプリント準備等)を授業分析をとおして共有できた。

(別添資料①)

また、スーパーバイザーや指導主事から今後の取り組みに生かせる新たな視点、指導のポイントなど貴重な指導助言をいただいたことも成果であった。特に授業改善の部分では、

- ・ 教師の情報入力を見直す(言葉による指示に偏っていないか等)
- ・ 子どもの活動の種類をチェックする(活動の要素を意識的に変える)
- ・ 指導案に「ここでは、こういう支援を入れている」ということを明示することによって、授業者自身が自覚でき、参観者も授業分析の視点を明確にする

といった視点を教えていただいた。

この指導力向上事業における学びが、その後の校内研や日々の実践のベースとなり、私の期待する方向への展開につながっていった。

2. 校内研究と特別支援教育のリンク

校内研に特別支援教育をリンクさせる、という提案は、当初職員の十分な理解を得られているとは言えなかった。そこで、「今年度の校内研究についての基調提案」(別添資料②)を出し、講師の杉澤指導主事にもその方向での助言をお願いした。講師は、私の意を汲み、今年度の本校の校内研究を次のように整理してくださった。

【研究推進の方向】

子どもの側に立ち、どの子ども生き生きと学び合い、自分の学びを自覚できる授業のあり方を探る」

- (1) どの子ども、生き生きと学び合える授業づくり
 - ① 導入の工夫
 - ② どの子ども学べる目標と見通しの明確化
- (2) どの子ども、自分の学びを自覚できる授業づくり
 - ① 学習展開の工夫
 - ② 学びをつなぐ評価の工夫
- (3) 書くことを活かす授業づくり
 - ① 書くことで、わかりやすく確かな学びをさせる工夫

研究授業は、5回(全校研3回、学年部研2回)行われた。前期、指導力向上事業で発達障害児の視点からの授業分析を学んだことが研究授業にも反映されていく形になり、それぞれの授業研究会で有効な指導の手だてが具体的に確認されていった。(別添資料③)

3. 特別支援教育総合推進事業巡回相談

田代先生からは、すぐパニックを起こす特別支援学級のM児、個室にこもるK児といった、課題の大きな児童についての事例をもとに「発達障害児についての理解と対応」を学んでいった。

田代先生は、我々が日々の指導で悩んでいることについて発達障害児の視点から分析し、解説して下さった。例えば、次のようなことである。

○OK児の極端な「こだわり」について

私たちから見たらこだわりだけど、あの子からしたら「自分を守ってる」と思っています。私たちは暮らしの中で結構あまい部分がある。でも彼はさっぱりそのあまいさが分からない。分からないから自分を守るしかない。「給食の食べ方はこうです。」「ぼくはめだかのえさを12時にやるんです。」と言って、自分で自分のやり方を築いていかないと、訳の分からないあまいことにはどうしてよいか分からなくなる。混乱するんですね。

○教師が笑顔の方が子どもがきゅっと集まる(1年の授業参観から)

通常学級の子どもたちの中には、がっと怒った方がよくできる子どもたちもいるかもしれない。けれど、特別支援の必要な子にとっては、それを真に受けるので、だんだん言うことを聞かなくなっていく。特別支援の対象でない子どもたちにはプレッシャーをかけるやり方でもうまくいくこともあるかもしれないが、支援の必要な子にはうまくいかない。そういう子どもたちもいる集団をうまくまとめあげようとするとき、どうするといいいのか、それが今日の先生方の対応なんですね

発達障害児の心理を論理的に説明していただくことで、我々の子どもの見方が深まり、指導の見直しにもつながっていった。否定的な行為を示す児童に対して、あくまで冷静に、威圧的にならずに指導の手がかりを探るという対応を多くの教師が心がけるようになったのもその成果の一つであった。

4. 日々の小さな取り組み

5月の「子どもを語る会」では、単に子どもの現状を出し合うのではなく、「こんなふうにやったらうまくいった」という日々の指導の中で手応えのあったことをみんなを出し合った。

○鉛筆をうまくにぎれなくて、文字を書くのに困っていた子に、樹脂製のグリップをつけてやったら、太くなってにぎりやすくなり、それからぐんぐん字が上手に書けるようになってきた。

○子ども同士がトラブルを起こしたとき、「何に腹が立ったの?」「それでどうしたの?」とていねいに訳を聞いてやっていると、最後は自然に収まっていく。

○プリントが早くできた子に「ちびっこ先生」になってもらって、子ども同士で教え合いをする、ということをやってみたら「先生、算数、好きになってきた。」と言ってくれる子が出てきてうれしか

った。

○私は「時間」を守るようにしている。チャイムが鳴ったら、学習が途中でぱつと終わるように心がけている。その方が子どもたちも気持ちよく動いてくれる。

○みんながいごこちのよいクラスにしたいと思って、「……してはいけません。」というマイナス言葉ではなく、「○○してみたらどうかな。」という言い方をしよう心がけている。

○つい厳しく注意してしまうこともあるけれど、「今日、先生ちょっと厳しくいいすぎてごめんね。でも先生の言ったことも分かってくれる?」と確認して、子どもがいやな気持ちのまま帰らないようにしている。

○子どもの前では、つとめて「ひまそうにしている」ように見せている。子どもって、忙しそうにしている人には話しかけにくいから。

こうした交流の機会はその後後設定できなかったが、それを補完するものとして特別支援教育コーディネーターが、「先生が明日からできること」（金子晴恵著・星雲社）の抜き刷りを毎日発行してくれた。とても具体的で、すぐに教室で試みられるような内容であり、「日々の小さな取り組み」に大いに寄与する資料となった。（別添資料④）

5. 実践研究の意識をつなぐための情報発信

特別支援教育は、日々の地道な実践なくしては進まない。本校の教職員に特別支援教育への意識を持ち続けてもらいたいという思いもあり、週1回発行している私の職場通信「学校づくりの記」には、意図的に特別支援教育に関わる内容を書くようにしてきた。また、前述の特別支援教育コーディネーターが発行してくれる資料や「特別支援教育だより」も意識をつなぐ有効な手だてとなっていた。（別添資料⑤）

V 取り組みの成果と今後の課題

1. 児童の変容

2学期を終えた今、特別支援教育の推進を目標に取り組んできた成果は子どもたちの姿の変容として見えてきている。

集団学習が成立しにくい状況にあった2年生は、今、穏やかに集中して学習に取り組めるようになってきている。一学期行き渋りの見られた1年児童も、担任のきめ細かな対応で安定し休まず登校できるようになった。その他、できるところをほめ、少しずつ集団学習への参加を働きかける中で学習に前向きな姿勢を示すようになった児童もいる。

こうした子どもの事実は、教師の意識改革と指導力の高まりによって生まれてきた成果だと評価している。

2. 教師の変容

下に示すのは、今年度の特別支援教育に関する本校職員の自己評価である。

■特別支援教育に対する教師としての姿勢

番号	自己評価の項目	十分できた	ほぼできた	やや不十分	できなかった
1	「特別支援教育はみんなにやさしい教育」という理念を共有する。	1	11	4	0
2	ハンディのある子どもの視点から自分の授業・指導のあり方を洗い直す。	0	9	7	0
3	専門家の指導を受けて特別支援教育についての理解を深める	1	13	2	0

専門家の指導による学びは大きかった。しかし、それを受けて自分の指導を謙虚に振り返り、改善しようとする動きはまだまだ弱い。「理解」は進んだが「実践」が伴っていないと反省する。

■特別支援教育の具体的推進

番号	自己評価の項目	十分できた	ほぼできた	やや不十分	できなかった
1	見通しが持てるよう一日のスケジュールを明示する。	4	10	2	0
2	視覚的な支援も使って話す。	0	12	4	0
3	短く話す、要点を示して話すなど、子どもに分かりやすい話し方をする。	0	11	5	0
4	「空白の時間」を作らないように意識しながら指導する。	0	9	7	0
5	授業の最初に1時間の内容の見通しを示す。	0	10	5	0
6	子どもの集中持続時間を考慮し、1時間の授業の構成をいくつかに分けて指導する。	0	7	8	0
7	支援の必要な児童に配慮したワークシート・プリントを作成するなど、個別のニーズに即した指導の工夫をする。	2	7	5	1
8	不要な刺激を与える掲示物を無くすなど教室環境の整理をする。	0	10	6	0
9	特に支援の必要な児童について、コーディネーターと連携してケース会議にかけるなど組織的対応をした。	0	9	4	1
10	特に支援の必要な児童について、保護者と連携して指導にあたる。	3	10	1	1

発達障害児を含む集団の指導で基本的に押さえなければならないことを10項目にまとめ、その実践度を評価してみた。全体として、取り組む動きにはなっているが、まだまだこれからという段階である。

今年度の取り組みは、校長としての思いを強く押し出したものであった。校内研その他の場面でもずいぶん前に出て動いた。それによって取り組みが進んだ部分もあれば、十分な職員の理解を得られず、逆に消極的な動きにさせてしまった部分もあった。しかし、次年度、本校の児童の課題は更に重くなる。今から備えを作らねば我々自身が苦しくなる。そんな思いで取り組んだ一年だった。